

あいだのすみっこ不定期漫遊連載 第26回

尺度をつかさどるのは誰か フーコーの振り子の傍らで

稲賀 繁美

(いながしげみ/国際日本文化研究センター、
総合研究大学院大学)

フーコーの振り子

ウンベルト・エーコの小説『フーコーの振り子』は、パリのサン・マルタン・デ・シャンに幕を明ける。1794年創設の国立工芸学校 Conservatoire national des arts et métiers (略称Cham) のチャペルに設置されたこの振り子は、地球の自転を計測する原器となる仕掛けで、1851年にレオン・フーコーがパンテオンで行った実験を踏襲したもの。小説冒頭には主人公がこの仕掛けに陶醉／幻滅する様が描かれている。一時期は低迷していたこの科学の礼拝堂は、近年ほかならぬウンベルト・エーコをはじめとした肝入りもあって、科学技術の歴史を記念する博物館へと装いを改めた。チャペル内部の舟形天井の下にも、初期蒸気機関の真つ二つに断ち割られた実物が何台も並べられ、その上空には時代物の滑空機や複葉機が、天井から吊り下げられて宙を舞っている。日本人観光客は皆無に近いが、子供連れには格好の殿堂だ。実際には予算不足で当初の計画は一部実現に止まり、非常勤職員の待遇も悪くて、私が訪れた当日も労働組合が「エーコ教授への公開状」なるビラを、会場入り口で撒いていたのだが。

とまれ、さる2004年5月28日、この会場を舞台に、「尺度の尺度あるいは《主なきメートル法 [mètre sans maître] 》と題する会合が、イラン大使ほかの要人の臨席を得

て、報道機関のカメラの放列のなかで催された。跨文化測候所 Observatoire transculturel なる機関を立ち上げるための発足式である。基調講演はウンベルト先生。甥／姪にあたる語彙としてnipoteしかないイタリア語で書かれた離婚騒動の文書を、例えばフランス語で解説しようとする、男女関係、年齢関係に関して順列組み合わせよろしく多数の解釈の可能性が広がってしまう。そのひとつひとつを近親相姦やらスワッピングやらとして微に入り細にわたって再話してみせる話術の才能を見せつけたウンベルトは、これをひとつの例証として、言語ごとの意味場とそれを統御するコードの差異が含む問題を取り上げたうえで、それらを統御するメタな水準でのコードの設定とその設定主体を問う問題提起を行った。そのテキストは追って公表されることだろうから、ここで詳細にわたることは慎もう。おりからパリに滞在していた筆者は、前日急遽呼び出され、開会式と第一セッションのテーブル・ロンドで即興の発言を求められた。以下その場での筆者の発言を再録させていただきたい。

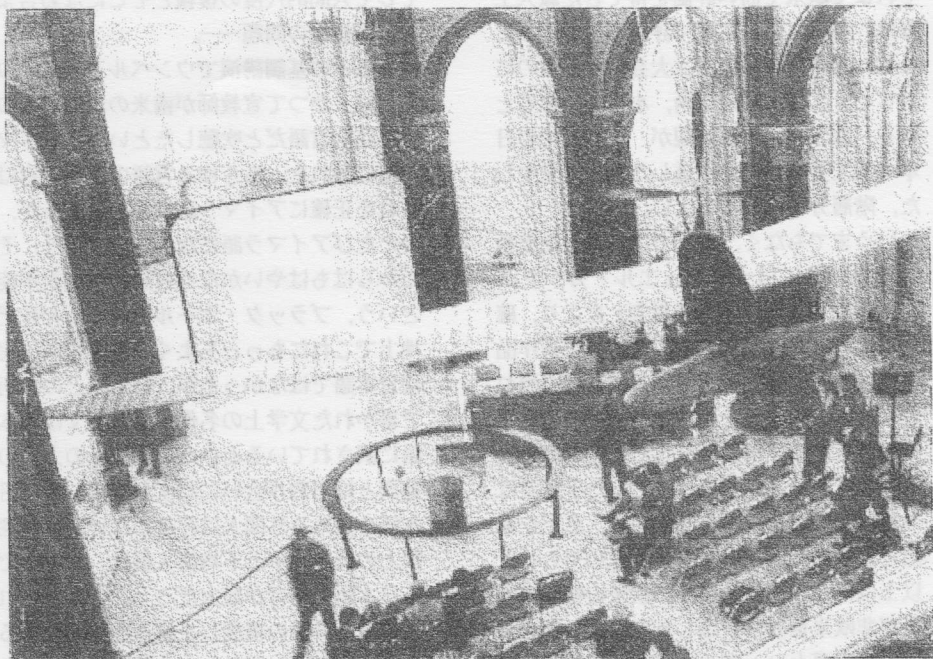
三角測量あるいは三つ巴

エーコ教授はこの20年来、文化間の対話を提唱し、相互人類学を提唱してきた。今回の企画もその一環をなすと聞く。そこで

さっそく、方法論的な提案をしたいのだが、そもそも文化間の対話の相互性など、どのようにして保証されるのだろうか。先ほど当方の旧友でもある、マリのムサ・ソから発言があったが、アフリカからの参加者が欧州で発言するというこの場にあつて、東アジアからの参加者として、まず最初に、双方性にかえて三角測量を提唱したい。これは川田順造氏も久しく訴えていることだが、欧州とアフリカとの対話を活性化するには、第三項としてアジアからの媒介が不可欠だ。南北とともに東西という軸を導入する視点は、国際日本文化研究センターで筆者が主宰した「文化の越境」(1999)や、2003年夏にイランのハタミ大統領の率先により東京と京都で実施された国連大学主催の「文明の対話」などの国際会議でも話者が提起したものだが、同様の3点測量の可能性は、さまざまに尺度を変えて適用することが可能だ。いうまでもなく、我々がマエストロ、ウンベルト・エーコの提唱する相互人類学に第三項として介入し、エーコ

教授に悪態をつくという役割も、相互人類学の二項対立構造に対する、第三項アジアの異議申し立ての権限を、この場の責務として遂行したまでのことである。

三項構造の有効性を示唆する一例をあげれば、昨年東京で開催されたロラン・バルト没後20周年の研究集会において、中国・北京大学の董強は仏・日・中の「黄金の三角地帯 triangle d'or」を提唱した。構造主義を代表するフランスの文芸評論家、バルトは『記号の帝国』ほかの著作を通じて、日本と特権的な関係をもっていたが、その仕事が中国で知られるようになったのは、ごこほんの数年のこと。『明るい部屋』が名訳を得て話題を攫ったが、そこで中国の知識人たちははじめて、バルトがすでに60年代後半には日本で高名となったばかりか、中国と日本とを明確に区別していたことに気づいた。日本と中国におけるバルト受容の40年近い時間差からは、逆に欧米内部では得られない立体的な相貌を帯びたバルト像が膨らみ始める。三つ巴構造への関心は、



シンポジウム開会直前の会場、サン・マルタン・デ・シャン。

国立工芸学校のチャペル中央の円盤がフーコーの振り子の鎮分。天井には初期の実験飛行機。(写真：筆者)

アンリ・トロワイヤのような小説家も関心を寄せているが、大切なことは、それが三項目の相互依存関係によって成立していることだ。韓国初代の文化大臣たる記号学者、李御寧も提唱するように、ジャンケン規則には、善悪を二元的に割り切ろうとする思考の限界を乗り越え、運動としての循環に優位を与える力動性の利点を認めたい。

美術と工芸をめぐる欧・中・日の三すくみ

さて、この会場が国立工芸学校であることから、工芸の尺度に関して一言述べておきたい。ここにも同様の三項構造が認められるからだ。中国では西欧の制度としての美術の受容は20世紀初頭まで積極的にはなされなかった。これは文人の伝統に照らした場合、西欧の写実主義美術は職人技藝の一種として、低く評価されたためだろう。これとは対照的に19世紀後半からの日本の支配層は、欧米の科学技術に高い関心を払い、それを職人技藝として貶める態度は取らなかった。ところが19世紀末に日本に欧米の定義に従った美術が根付くとともに、それまで欧米で高い評価を得てきた職人工藝は、日本において低く評価されるようになる。美術は高級芸術、大芸術であるのに対して、工芸は応用芸術、小芸術であるとする、欧米近代の価値観が、それまでの日本の手工業生産業に浸透したために発生した、階層分化といってよい。

いうまでもなく、欧米ではこうした美術観は哲学的にはイマニュエル・カントが1792年に著した『判断力批判』により、確立したといってよい。そこには、芸術作品とは才能をもった個人の精神的活動の現れとしての、独創性を帯びた創作活動の成果であるとする理解が成立した。この価値観によって、日本にそれまでであった手工芸は、いわば美術の母親でありながら、息子を嫡出とは認知できない立場へと追いやられた。以上はほんの一例ながら、欧米の物事の基準が非欧米世界に及ぼした影響の一端を物語る出来事といってよいだろう。美術に関して論じる場合の尺度そのものを規定する

尺度が、改めて問われなければならない。その教訓を、国立工芸学校に相応しい話題として提供してみた。(以上、要旨)

翻訳可能性への懷疑

続いて、会議はパンレーヴ大階段教室に会場を移し、午前のテーブル・ロンドが始まった。着席してみると、「認識における尺度、メートルと文化モデル」というのがお題であることが、その場で明らかとなる。トリ役での意見表明だが、先般の挨拶と同様、事前に書類など一切受け取っていないから、その場での即興の準備を強いられた。このため座長のMarc Himbert (フランス)、Cnam, Ahmed Djebbar (インド)、Zhao Tingyang (中国) の3名の、先行する発言には踏み込めないことをお詫びしたい。話題として簡略に触れたのは、以下3つの論点だった。すなわち、抽象的な尺度の客観性や有効性を述べ立てる論者への反論と、特定の尺度——それがそのものとしてどれほど客観的に妥当するものであれ——を現実適用する行為に含まれる政治的な要素、そして人間的尺度の復権とそこになお含まれる価値観の問題——。

先ほどの基調講演でウンベルト・エーコ先生は、かつて宣教師が南米の奥地に見つけて完全言語だと吹聴したという、アイマラ語に触れた。あらゆる言語の表現内容は、これを正確にアイマラ語に翻訳できるが、ひとたびアイマラ語になってしまうと、ここからはもはやいかなる言語にも翻訳不能という、ブラック・ホールのような存在だ。地上でこれにもっともよく似た言語が、実は日本語ではなかったか。ほとんどの言語で書かれた文学上の名作や主要論文は日本語に訳されているというのに、その大量の翻訳とは不釣り合いにわずかな数しか、日本語を読める外国人は存在しない。この翻訳上の貿易赤字と不均衡入超は、地球上でも日本語の場合が最大だろう。そしてこれは言語と言語の橋渡しを試みた経験のあるほどの人なら、だれしも体験なさっただろうが、分かりやすい翻訳に接して、原文が

見事に移し替えられている、などと思うのは幻想だ。先ほどエーコ先生はイタリア語とフランス語とのあいだで発生しうる誤解について、軽妙に語ったが、このふたつの言語が、地上で言語的距離のもっとも小さい二つの国語であることはお忘れなく。戯曲の翻訳などのような語り物の場合を取れば、日本語原文と、読書可能な欧米語訳とは、実際にはまったく別物と思ったほうがよく、翻訳はかろうじて話の筋を読み取る便宜を提供する程度のものでしかない。このあたり、翻訳の実効性に関しては、ゆめゆめ楽天的であってはならず、用心が大切だ。

尺度共有の光と闇

こうした言語間の渡りに不可欠の困難は、アンベール氏が分析した昨今の電子機器の発達によって、かならずしも解消されたわけではない。それどころか、日本語とフランス語とのあいだに関する限り、電子メールの発達は、両者の意思疎通や電子情報の授受をかえって困難にしてしまった。日本語の漢字・仮名は4桁のデジタル・コードで電子情報に変換されるが、これが、2桁でできているフランス語のディアクリティカルを含む2文字のアルファベットと、4桁の数字として競合してしまうため、フランス語で発信された電子メールは、日本語で開くと、漢字使用者も見たことのない珍妙な漢字に変換されて出力される。反対に、日本から発送するフランス語の電子情報も、フランス側では不完全にしか解読できず、その結果、原稿を投稿しても、システムの通約不可能性 incompatibilité を理由に、不完全原稿ゆえの受取り拒絶や、掲載拒否にあたりする確率が、近年かえって上昇してしまった。

むろんこうした不如意は、国際統一コード (uni-code) の設置と実施によって、技術的には解消可能なはずだし、近い将来消滅することが期待されている。だがここで問題としたいのは、尺度の統一が、利便性を隠れ蓑として発揮しかねない、覇権の政治

性、という問題であろう。というのも、特定のコードの採用を拒絶することによって、いとも簡単に、ある特殊な言語を国際市場から排除することだって、可能だからである。その裏返しとして、参入を認可する決定が、利便供与と直接に結び付くことで、普遍主義の善意の裏に、いかなる裏取引——見返りとしての賄賂の強要など——を準備しうる危険を孕んでいるかも、容易に納得できるだろう。

人間的尺度再考

こうして特定の尺度を選択することの政治性が、あらためて問題となってくる。先ほどもエーコ先生が、ドーヴァー海峡のこちらと向こう側とで、長さや重みの単位が異なる様を面白おかしく笑い話として語ったが、例えば皆さんは、世界で通用している日本の尺度というのをご存じだろうか。真珠の養殖は御木本幸吉が実用化したのが、今日もなお、その貢献に敬意を表してか、あるいは真珠市場で日本が覇権を握った歴史的経緯ゆえか、真珠の国際取引では「匁」^{もんめ}という日本の重さの単位が用いられている。これはお国自慢ではなく、度量衡の選択における覇権が、現場での支配権の優劣と密接に結びついている、という現実を思い出すためにあげた一例にすぎない。中国では秦や漢といった古代帝国が中原を支配したおりに、全土の度量衡の統一を貫徹した史実が知られるが、それは尺度の統一と管理、さらにその強制が、政治・経済の支配の道具であったことを、古代の為政者が熟知していたからに他ならない。

そのうえで、地球の寸法を基準として機械的・抽象的に割り出したメートル法や、水の氷点や沸点を基準とした温度尺度、水のメートル法を基準とした体積から割り出された重量基準としてのグラム法などが、はたして人間的な寸法といえるのかどうかは、再考を要するだろう。フランス大革命にともなって制定されたこれらの尺度は、科学性の名のもとで、人体の寸法にあったかつての基準を、時代遅れのものとして放

逐した。だが近代機能主義の父、ル・コルビュジエの提唱したモデュール（modulor「基準」と「黄金律」の合成語）が人間の寸法に合わせて、住む機械たる建築の基準を再定義したのと同様、住居や日常生活を律する基準としては、人体に合わせた単位のほうが、人間工学的にみれば、より合理的でもあるだろう。

とはいえ、近年の旅客用航空機の内装など見ると、米国製の機内備品などが、設置場所の寸法から大きくはみ出したり、ひどく寸足らずだったりする場合は、極めて多くみられる。よくまあ、あんな杜撰なことで飛行機が安全に飛ぶものだ。米国はインチよりも細かい単位がないから駄目なのだ。日本のようにミリ単位やミリ単位以下の仕事など、ヤンキーにできるはずがないといった、いささかならず国粹主義的な技術優位の主張も、なかば冗談交じりの口調で、日本人利用客の口から漏れ聞く折節もある。おそらく問題は、納入に際し、親会社と子会社のあいだで、製品形状の微調整を怠らない日本の製造業の伝統と、契約書の仕様をあくまで貫徹する米国流の商取引の習慣との差、に帰着するところが大半ではあろう。だが基準寸法の違いも、そうした文化土壌の違いに、何がしかの影響を与えていないとも限るまい。

伝統的基準の現実不適応

欧米においてもそうであったように、日本の場合にも、西欧化以前には、メートル法とは異なった、人体を基準とする寸法が生活を律してきた。例えば食事を配膳するお盆の幅は、標準的な婦人の肩幅に対応しており、それを倍にしてやや余裕を与えた値が、廊下などの幅の基準となる。お盆をもった人間ふたりが往来して支障を来さない幅が、民家の廊下には適切だったからである。これがひいては畳の基本的な寸法を提供するが、これは標準寸法の人間が寝起きをするのに適性な、寝具の寸法ともなる。さらに配膳の基本に戻るならば、膳のうえに配列されるさまざまな椀や皿の類いも、

けっして気まぐれな直径や重さに作られてはいない。必要な一式が、肩幅の膳に収まるように寸法が調整されているが、それが例えば手で椀を持ち上げるのに、ちょうど適した椀の直径に見合うこととなる。その限りでは、高度な合理性によって、すべての調度の寸法が相対的に決定され、ひとつの体系性をなしていることが納得できる。

これは儒教が練り上げた人為的な哲学や、位階制による大小や軽重の区別とは、かなり異質な分類基準といってよい。儒教にあっては、親子の礼や社会的階層の儀によって、物事の大小を（恣意的に）律し、孝や忠を数量化した複雑な規則体系を作り上げているが、それらは日本流の、あくまで実用に徹して日常生活を律する基準寸法の意識からは、大きく逸脱しているからだ。両者の差異は、韓国と日本の儀礼的食膳の差異に明らかだ。

とはいえ、こうした日本の伝統といつてよい、人体の寸法に合わせた基準にも、近年では大きな問題が生じている。すなわちもし皆さんが（フランス大革命の基準を用いるなら）身長180センチメートル以下であったなら、この日本の基準の枠内に合致して、日本的空間の内部にあっても、比較的快適な生活を送ることができるだろう。だがもし180センチの限界を越えてしまえば、日本の生活空間は、いわば小さすぎるプロクルステスの寝台へと変貌して、皆さまを苦しめることになるからだ。生活の西欧化とともに、日本人にもこの身長制限を越える個体が増加しているが、彼ら、彼女らの身体感覚からみれば、日本的尺度は、その合理性の根拠をすでに失っている。かつての織物の反物は、手織りの機横糸の幅によって規定されてきた。これは機を扱う職人の肩幅に対応していたわけだが、この幅でおられた反物では、現代の日本人女性の着物の寸法としては、すでに寸足らず。ましてや、豊かな西欧人女性の寸法に合うような着物は、現行の反物では出来上がらないので、くれぐれもご注意ください。

内実と基準の弁証法

ことほどさように、寸法の基準というものは、それを使用する主体の寸法と無縁には決めがたい。そしてどのような基準が現実合致するか、という判断にも、また特有の価値観が反映されることは、避けがたい。もうひとつ日本の基準が国際標準となっていながら、近年その権威が失墜している領域から話題を拾って、最後の問題提起としたい。本年はアテネでオリンピックが予定されているが、柔道は日本に生まれ育った格闘技でありながら、国際的認知を受けてすでに半世紀を経過し、スポーツ競技において、国際的に普及している。ところが柔道が国際的に認知されるのに伴って、その競技規則は、日本柔道連盟の度重なる反対にもかかわらず、国際柔道連盟の主導で改変されてきた。その結果、今日では、「一本勝ち」という豪快な勝負は、「有効」、「効果」（1973年に導入）といった小技のポイント稼ぎに座を譲りつつあるとの指摘もある。日本の柔道家のなかには、こうした変質を柔道の墮落と、否定的に評価する向きさえある。だがそもそも投げ技や寝技による一本勝ちという規則を導入したことからは、柔道は近代スポーツという、西欧起源の競技種目の仲間入りを果たしたのではなかったか。とすれば、柔道は、その出発点から、日本の伝統たる柔術の基準を逸脱していたはずだ。

実際、嘉納治五郎が1883年に提唱した柔道とは、柔術の技のうちで、危険な関節技などを排除し、学校での体操正科として相応しい要素のみを抽出して編み出した、その限りではきわめて西洋臭い、新規設立の競技科目だった。柔術の技であれば、相手の戦闘能力を奪うことに技法の価値が置かれるのだから、もとより安全に受けの取れるような投げ技は、技として無意味に等しい。したがって柔道で認められるような「一本」という勝負の認定も、柔術の世界にあっては、そもそもの価値基準から逸脱している。その限りでは、近代柔道は、競技種目としての自己規定を下し、スポーツの仲

間入りを選択した瞬間に、柔術の伝統からの訣別を宣言していたことになる。

また、スポーツの一種としての柔道の成立とともに、その母胎であった柔術も変質を遂げたわけだが、これは、西欧の制度として美術が基準として移入されたところで、その母胎であった工芸が変質を遂げ、価値下落を被ったのとも平行した現象といえるだろう。西欧の基準に合致した美術の形成は、国民主義の訴えの一環だった。それと同様に、日本近代柔道も、自国の文化的伝統の刷新と国際的認知を目指した国民主義的運動の一翼を担いつつ、実際には西欧の競技スポーツという基準に我知らず擦り寄った選択だったことになる。新渡戸稲造の提唱した「武士道」と並んで近代柔道もまた、伝統擁護の主張そのものが、西欧近代という符丁に染め上げられた、今ひとつの「伝統の創成」であった。

近代柔道の成立を通して見えてくるのは、新たに選択された基準が、認識における文化モデルの在り方ばかりか、その規則に則って競技に参加する運動選手の身体機構、さらには身体的価値観までもを規定している、という事実だろう。この例は、手仕事から身体技能に至るまでの広がりをもつ技能の伝承と育成をつかさどる、主なき基矩 (*mètre sans maître*) の、ひそやかなる支配権 *maîtrise* のほどを物語っている。このたびは、フーコーの振り子に見下ろされた、ここ国立工芸学校を欧州における本拠地として、文化を跨ぐ視野にたつて、文化の基矩とその基矩を貫徹する権力の作用とを観測する国際的な測候所が設けらることとなった。今日その発足式の舞台に招かれ、挨拶を申し上げる榮譽に恵まれたことを感謝し、測候所の将来を言祝ぐとともに、その使命が今後ひろく全地球的な広がりをもって完遂されることを祈念してやまない。

*原文は当日フランス語で即興で述べたものである。美術の世界にあっても、そもそも価値判断の尺度をどこに求めるか、は看過できない問題だろう。読者のご批判を待ちたい。【筆者】